

上代における憑依表現の研究：「カムガカリ」を中心に

藤崎, 祐二

<https://hdl.handle.net/2324/4474907>

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	藤崎 祐二			
論文名	上代における憑依表現の研究 ——「カムガカリ」を中心に——			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	辛島 正雄
	副査	九州大学	教授	高山 倫明
	副査	九州大学	准教授	川平 敏文
	副査	九州大学	教授	坂上 康俊

論文審査の結果の要旨

本論文は、『古事記』と『日本書紀』に、それぞれ一回ずつ見える「カムガカリ」の語に焦点を当て、上代における憑依表現の実態を、用いられた漢字をつぶさに検討することにより、その訓を確定する中で、浮き彫りにしようとするものである。

「カムガカリ」の語は、アマテラスをアメノイハヤから誘い出す場面において、アメノウズメの行為として見え、『日本書紀』の「顕神明之憑談」という文字列に対する訓注に「此云歌牟鵝可梨」とあることから、訓が確定される。同じ場面について『古事記』では、「神懸」と表記しているが、同様に「カムガカリ」と読むものと判断される。この語を起点にして、上代の文献に見られる憑依表現を精査すると、「著(着)」「託」「認」「憑」「帰」の文字が憑依の意味で用いられていると思われる。「カムガカリ」とも関連づけて、従来しばしば「カカル」と読まれてきた。しかし、それらには訓注がなく、本当にそのように読んでよいものかについては、慎重な判断が求められる。

そこで、まず用例の多い「著(着)」「託」の読みと語義を検証し、これが「ツク」と読むべきものであり、「カカル」とは明瞭に区別すべき文字であることを明らかにする。特に使用頻度が圧倒的に高い「託」の文字については、漢籍では「とりつく」の意での使用が見出したい一方、『日本霊異記』ではすべて「とりつく」の意であるなど、その差異が甚だしく、そうした違いが生じた原因を、和語「ツク」に《頼る系》の意味と《附着・接着系》の意味とが認められることから、《頼る系》の意味しかない漢語「託」に和語「ツク」を当てた際、《附着・接着系》の意味にひきずられた結果ではないかと推定する。また『万葉集』に一例見える「認」も、「ツク」と読むべきとする。

さらに「帰」と「憑」については、「ヨル」と読むべき蓋然性が高いことを示し、ここであらためて「顕神明之憑談」という文字列に立ち返ると、これが、「神明が寄(憑)り、語(談)ることを明(顕)らかにする」意と説くことができ、特に名を「顕す」ことに重点を置いた「カムガカリ」という行為の実態を窺うことができるとする。その上で、上代における神と人との交流や関わり合いを表現するのが「カカル」であり、「ツク」「ヨル」はそれを構成する一要素であると結論付ける。

以上のように、本論文は、用例の乏しい「カムガカリ」に注目し、憑依に関連する漢字とその語義についての徹底的な検証に基づき、その実態や意味を明らかにしたものとして、独自の成果を上げており、今後の発展も期待される。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。